

# 保育者養成課程における子どもの自然体験活動の意義

－東洋英和女学院大学と横浜市の共催による

「もりっこ」活動を事例にして－

山下 久美

キーワード：子ども、自然体験、保育者養成課程、教育効果

Children, Nature activity, Child Care training course, Educational effect,

## I 序文

2010年、国立青少年教育振興機構では、幼児期から義務教育修了までの各年齢期における多様な体験とそれを通じて得られる資質・能力の関係性を把握するため、体験活動に関する調査を実施し、結果を報告している。その報告によれば、子どもの頃の自然体験は、その直後だけでなく、大人になってからの共感性、意欲・関心、規範意識、人間関係能力などにも影響する可能性が示されたという。特にそれは低学年であるほど、顕著であった。

しかし一方で、子どもの体験活動の場や機会の減少が指摘され、学校以外の公的機関や民間団体が行う自然体験活動への参加率は、近年どの学年でもおおむね低下している。子ども・若者白書（文科省，2013）によると、1998年と比較して2009年には小中学生の中で自然体験をしている者の割合が、どの学年でも様々な項目において全般的に減少しており、小学校4～6年生では2006年から2010年度にかけて10%ポイント以上低下しているという（文科省，2013）。

以上の調査は家庭での調査であるため、改めて小学校での自然体験活動の機会についての報告を確認すると、近年いくらか回復傾向にあった自然体験の機会は2006年度からは再び減少に転じ、毎年減り続けていることが分かる（文科省，2013）。家庭や地域だけでなく小学校でも自然体験の機会が減少しているとなれば、もはや子どもたちには自然と触れ合う場や機会がほとんどないと言えるだろう。

さらに近年では保育所に通う乳幼児が増えているが、保育所は園内に庭があることが必須条件ではなく、「保育所の付近にある屋外遊戯場」<sup>1</sup>でも認められているため土地を確保しにくい都市部では園庭の無い認可保育所、認証保育所などが増えており（日本共産党都議会、

2015)、その意味でも子どもたちが自然に触れる体験が減ってきていると言える。

しかし子どもの成長発達にとって重要な機会である自然体験がこのように減少し続けていることは憂慮すべき事態であり、こうした事実を認識した上で、子どもに関わるあらゆる機関が何らかの対策を講じていくべきと考える。

そこで保育者養成課程を持つ東洋英和女学院大学（以下、本学とする）では、横浜市と共催で、3歳から小学校2年生までの子どもとその保護者を対象に自然体験を通じた森林保全教育の場（よこはま森の<sup>がっこう</sup>楽校<sup>2</sup>）を設けてきた。この場で子どもへの教育効果については山下・加覧・澄井・谷田（2017）が既に報告しているが、この活動自体についてと保護者や子ども自身がどのような感想を持ったかについては、未報告であった。そのため本論の目的は、本学が2012年から6年間、横浜市と共に行ってきた活動の報告と、参加者からの意見・評価を振り返ることによって、この活動の意義を再検討することにある。

## II よこはま森の楽校「英和もりっこ」活動報告

### 1. 活動開始の経緯と目的

本学は神奈川県横浜市緑区に位置し、三保の森と新治の森という二つの森に挟まれた形でキャンパスを有している。敷地面積は169,671.01㎡、その内、緑地面積は93,491.81㎡と恵まれており、大学移転以前からの自然林や湧き水による溜池が、キャンパス内には残っている。この環境を生かして、本学保育者養成課程の学生が、一ゼミ活動として文化祭やその他の大学行事の中で近隣の子どものを招いて行う自然遊び体験活動を、「もりっこ」とネーミングして2007年から行ってきた。

2011年、横浜市から市内の大学に対して活動助成予算を伴う「よこはま森の楽校」の開催校募集があり、市民が森林保全意識を高められるような講座の開催を求められた。本学では前述したような活動を行って来た経緯があり、内部のマンパワーを考慮に入れると、最も貢献できるプログラムは、雑木林（横浜市保護林を含む）の中での楽しい自然遊びを地域の子どもとその保護者に提供することだと考えられた。

またこのような活動であれば、自然体験活動を提供できる保育者（幼稚園教諭・保育士）の養成にもつながることから、継続的でなおかつ広がりを持った効果も期待できる。本学保育子ども学科では保育職に就く卒業生が多い（近年平均70%以上）ため、森林保全意識教育や自然体験提供の実践力を持った保育者を現場に送ることで、次世代の意識向上にも貢献できるからである。

2012年「英和もりっこ」としてこれらの企画を横浜市に申請し、採択された。市は1イベント企画に10万円を上限とした予算を付け、イベント開催を市民に周知し、スムーズに実施されるよう見守ることで森の楽校イベントを支え、2017年度現在も継続されている。

## 2. 2012～2017 年度現在までの参加者、実施日、活動場所

### (1)参加者と人数

①地域住民参加者：6年間 参加総人数 1083人

子ども：3歳から小学2年生とそのきょうだい、合わせて6年間で549名の参加があった。

保護者：年度により変化するが、両親揃っての参加が最も多く40～50%程度、次いで母親のみの参加が約40%前後、父親のみ10～20%、少数ながら祖父母が参加する家族もあった。参加総数は534人だった。

②学生参加者：6年間 参加総人数 622人

保育者養成課程の免許・資格必修科目である「保育内容各論 環境」履修者全員と、同課程の英和もりっこ活動経験者である筆者ゼミ学生（3・4年生、20名前後）が参加した。ゼミ学生が他の学生活動をリードし、企画・運営を教員と共に行った。

### (2)実施年月日・回数・時間

① 実施年月日：2012年6/23(土), 7/14(土), 9/29(土), 10/23(火), 10/27(土)、  
2013年5/18(土), 6/1(土), 7/20(土)  
2014年5/24(土), 6/14(土),  
2015年6/1(土),  
2016年5/28(土), 6/11(土),  
2017年5/27日(土), 6/10(土),

②6年間の開催回数 計15回

③プログラム実施時間 2時間半～4時間

2012年度 11:00～14:00、2013年度以降は9:30～12:00

本プログラム開始当初は、11時からのプログラムであったが、2013年度からは、保護者からの希望が多かった9時30分～12時の時間帯とした。しかし終了後も1時間以上滞在する家族が多く、実質開催時間は3～4時間であった。

### (3)活動場所

東洋英和横浜校地（横浜市緑区）の雑木林と池周辺、および講義室・調理室であり、本論末尾に、2016年に使用した構内図を資料として添付する。この構内図は、面積割合・位置などを正確に描いたものではないが、建物と緑地部分を分かりやすく、なおかつ親しみ易く描いたものであるため、保護者に道案内用として配布している。植物の状態や虫などの生息状況はその年によって異なるため、毎年活動内容を変化させ、それに伴って記入事項を変えている。

### 3. 実施されたプログラムの概要

内容の詳細は各回ごとに变化したが、最も代表的なプログラムは以下のとおりである。

#### (1) プログラム流れ

9:30 受付開始

9:45 受付を済ませた家族から森の散策へ出発 学生と森散策・自然遊び体験

11:10 散策後は順次森の恵み野草の試食、自然工作、芝滑り、絵本・虫コーナーで楽しむ

11:50 自作紙芝居「森のちから」

12:00 解散 学内で自由に自然遊びの続きや昼食

#### (2) 内容

##### ① 森散策と自然遊び

学生が子ども一人に一人ずつ付き添い、様々な自然遊びを紹介しながら、家族単位で森を散策する。

##### 森散策の中で子どもたちに提供された主な内容

- ・ 学生の案内によって雑木林を巡りながら森林浴や鳥の声を楽しむ（写真1）。
- ・ 昆虫（バッタ、カブトムシ幼虫等）や水生生物（オタマジャクシ等）を興味に応じて観察したり、捕獲する（写真2）。
- ・ 学生が提供する草花遊び（草笛、スギナ遊び、オオバコ相撲、シロツメクサの冠遊び等）を楽しむ（写真3）。
- ・ 食べられる植物（ヨモギ、サンショ、ミツバ、ミョウガタケ）を見分け、採集する。
- ・ 自然に生えているコナラやヒノキなどの大木と小さな実生を見比べ、大きな木に育っていく課程を想像し、森の成り立ちに触れる。
- ・ 散策後の自然物制作などで使用する材料（木の実・木の葉・花など）を集める。



写真1 森散策する家族と付添学生

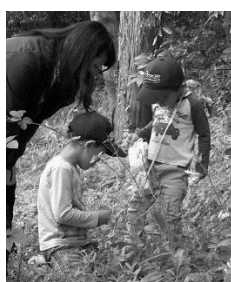


写真2 虫探し



写真3 草花遊び

## ②森の恵み試食

- ・散策で採集したヨモギ・サンショ・ミョウガタケなどを学生に渡し、目の前で調理する様子を眺め、その後、家族で試食する。

## ③自然物制作

- ・草花・木の実・小枝などの自然物を使い、壁飾り・メモボード・小物入れなどの工作や、草木染などを体験する。

## ④紙芝居

- ・森の重要性を幼児にも分かりやすく伝えるために、本学教員と学生によって作成された紙芝居を見て楽しむ。

## ⑤虫と絵本のコーナー

- ・採集してきた虫（蝶・カブトムシ・トンボ幼虫や成虫、カタツムリなど）を、ケースに入れて眺める。  
興味が湧いた虫については学生と一緒に観察したり、学生から生態の説明を聞いたりする。
- ・その季節や展示する生き物に関する自然絵本・図鑑を並べ、手に取って眺めたり、学生と共に読んだりする。
- ・当日の散策コースにはない木の実などが展示されているので、匂いを嗅いだり触ったりして楽しむ。

## Ⅲ 地域参加者からの評価について

### 1. 地域参加者の評価調査目的

以上のように、英和もりっこ活動は行われてきたが、参加した地域住民は本プログラムをどのように評価したのか、より良いプログラムの実施と継続のため、調査を行った。

### 2. 地域参加者の評価調査の方法

#### (1) 調査対象

- ①もりっこ参加子ども（幼児と小学生）223人。
- ②もりっこ参加保護者（各家族つき1名）296人。

#### (2) 調査年月日

- ①子ども：2014年5/24（土）・6/14（土）  
2015年6/1（土）  
2016年5/28（土）・6/11（土）
- ②保護者—本論Ⅱ, 2, (2), ①の2012年～2016年（5年間）までの開催日に同じ

### (3) 手続きと内容

- ①子ども調査：もりっこ始当初、筆記式のアンケートは低年齢児にはそぐわないと考え、実施しなかった。しかし3年目から自筆できない場合は保護者に協力をあおぎ、もりっこ終了後、用紙を配布してアンケート内容の聞き取りと、記入を依頼する方法で行った。
- ・子どもアンケート内容：「今日一番楽しかったこと」「もっとやりたいこと」「もっと知りたいこと」「分かったこと」についてすべて自由記述で回答を求めた。
- ②保護者調査—もりっこ終了前の紙芝居の時間に、アンケートを配布、回収した。
- 保護者アンケート内容：本活動への保護者の満足度について（満足から不満までの4段階評価）と自由記述での感想。

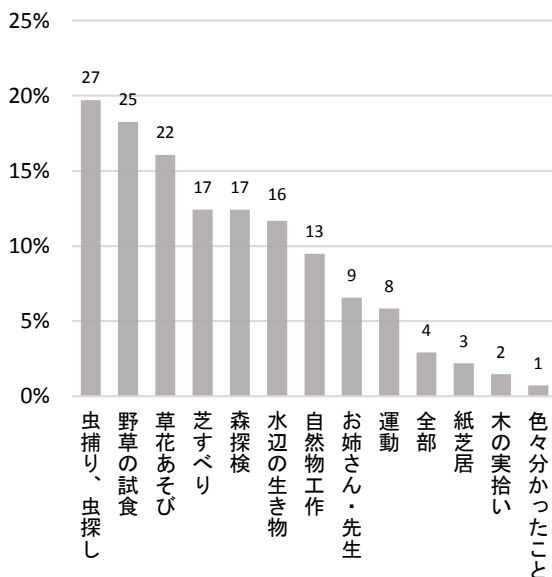
## 3. 地域参加者の評価の結果と考察

### (1) 子どもアンケート結果と考察

参加した子ども 223 名中、回答があったのは 137 名だった（回収率 61%）。聞き取りに時間がかかるためか、必ずしも保護者の協力を得ることはできなかった。

#### ①一番楽しかったこと

自由記述で回答を求めたが、137 人すべての子どもが記入していただけてなく、複数の活動を回答している子どもが多く、総数としては 164 になった。それらをカテゴリー化したものを図 1 に示す。全部楽しかったという回答をした子どもも 4 人いたが、各項目に加えるの



ではなく「全部」というカテゴリーとしてまとめた。楽しかったことが、何かに集中することなく、それぞれの子どもで異なっていることが分かる。

その中でも一番多かったのは「虫捕りや虫探し」で 20%の子どもが上げていた。次が野草の試食(18%)で、これは1年目に希望があったため翌年から開始したものである。保護者からは「家庭では野菜嫌いで、

図1 子どもが一番楽しかったと感じたこと

一切食べない子どもが、自分で摘んだ野草の天ぷらだと喜んで食べていて驚いた」などの感想が毎回複数寄せられた。3番目が草花遊び(16%)だった。このように回答は一見分散しているが、虫捕り・虫探し、野草摘み、草花遊び、水辺の生き物(12%)、木の実拾いなどは、全て森探検の中での活動である。つまり「森探検」と回答しなかった子どもも、その多くが学内の雑木林や池での何かしらの活動を、一番楽しいと感じていたことが分かる。

その他、段ボールを使って芝を滑る遊び(12%)や、森探検で見つけた木の実を使っての工作・摘んだ花などでの染物遊び(9%)を一番楽しかったと回答している子どももいた。7%は、お姉さん(学生)と遊べたことが何より楽しかったとの回答だった。6%の運動の項目は、高低差のある雑木林を歩き回ったこと、木登り・木にぶら下げたロープブランコをしたことなどの記入をまとめたものである。

## ②もっとやりたいこと

137人中49人の記入があった。内容としては一番楽しかったことと同様、虫やオタマジャクシなどの生き物を捕まえること(18人, 13%)であった。次が森探検(11人, 8%)、草花遊び・木の実拾い(6人, 4%)などであり、雑木林内での活動をもっとしたいというように読みとれる。

## ③もっと知りたいこと

32人の記入があった。最も多かったのは花や木など、今回、覚えた以外の植物の名前(14人, 10%)で、次いでカブトムシや水辺にいたトンボ・カゲロウなどの昆虫、オタマジャクシ・カエル等の生態について、もっと知りたい(13人)という回答であった。その他、料理・草花遊び・自然の色々なこと、が各1人ずつであった。

## ④分かったこと

最も少なく、わずか7人の記入であった。森やそこにいる生き物が大切だと分かったという記述が4人、花など植物の種類が3人で、これらは全て小学生以上であった。また小学生1名からだけであったが、「色々分かったことが楽しかった」という回答があり、自然遊びを通して植物の名前や虫の生態など、様々な知識に触れたことに楽しさを感じている子どもがいることも分かる。低年齢の子どもであっても「分かること」は重要であるには違いなく、また観察から、好奇心や意欲を持って自然についての多くの知識を得、学んでいる様子が確認されているが、低年齢の子どもにとっては、「何が分かったか」を意識すること自体が難しかったと考えられる。今後、質問方法等を検討する必要があるだろう。

## (2)保護者アンケートの結果と考察

アンケートは家族単位で行うため296家族を対象に行った。その内273家族から回答があり(回収率92%)、有効回答数は270であった。

### ①保護者の満足度

満足度の4段階を、「とても満足」「満足」「不満」「とても不満」で表すと図2のようになる。270家族中234家族の87%の保護者が「とても満足」と回答し、「満足」の回答は35家族13%だった。不満は1家族で1%に満たない0.34%で<sup>3</sup>、とても不満と回答した家族はいなかった。

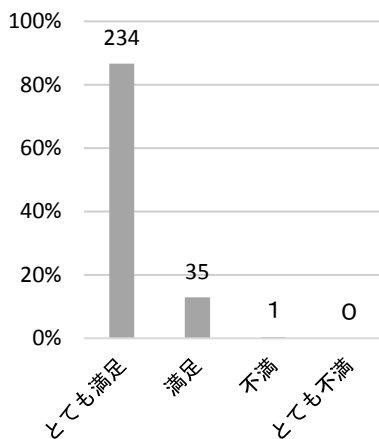


図2 保護者の満足度（家族単位）

### ③保護者が抱いた感想（自由記述より）

自由記述は、181書き込まれていた。内容は様々であるが、幾つかの 카테고リーに分けることができる（各カテゴリーにアンダーラインを引いて示す）。最も多かったのは、学生が子ども一人ひとりに付き添って森を案内したことを高く評価するものだっ

た。全体の54%が個々の興味・関心やペースに従って動植物や自然遊びを紹介したことを喜び、「お姉さんが色々教えてくれて子どもも嬉しそうだった。」「人見知りな子どもたちと上手に距離を縮めていると感心した。」というような内容の記述である。次に多かったのは、様々な自然体験やプログラムが用意されていたことを評価するもので、約24%あった。

その他は、草花の美しさなど学内の環境についての好印象が8%、「月に1度は、開催して欲しい。」というような開催数増加への要望（6%）、子どもたちの興味や関心が広がって良い学びの機会になった（4%）、野草料理を初めて食べたが美味しかった等の感想であった。

## IV 考察一本活動の意義

### 1. 英和もりっこの地域への根付き

多くの参加者から高い評価を得てきたことは既に述べたが、高評価であったことの裏付けとしてもう一つ挙げられるのは、参加申し込み人数の増加である。2012年の開始年には20家族の参加者を募集するために2週間を要した。しかし翌年から1日の参加人数を多く設定したにも関わらず、申し込みが3日ほどで定員に達するようになり、2016年は60名の募集に対して、3日間の申し込み期間に約4倍の240名の申し込みがあった。参加希望理由としては「昨年も楽しかったから」「友達（親同士）に良いプログラムだと聞いたから」などが多く挙げられており、地域から求められる自然活動を提供し続けてきたからこそその申し込み人数の増加であると考えられた。その意味でも開催の意義が十分にあったと良いであろう。



## 2. 特徴・独自性

ここまで本学での取り組みを報告したが、横浜市と大学が共催する森の楽校については、他大学の活動も継続して実施されており、また保育者養成課程の学生が大学の中で自然体験をする報告や、その効果についての論文も散見される。そこで、本活動の意義を考察するにあたって、他大学での実践や報告を踏まえながら本学の特徴・独自性について確認する。

### (1) よこはま森の楽校としての「英和もりっこ」の特徴

森の楽校には、2016年度までは本学を含めて3大学（4研究室）が参加し、2017年度は4大学（5研究室）<sup>4</sup>が参加している。その中での本学としての特徴の一つ目として挙げられるのは、幼児とその保護者を対象にしてきたということである。2012年当時、幼児を対象にしたものも、また保育者養成課程の学生が関わるものもなく、幼い子どもへの対応として地域住民からの潜在的なニーズがあった。他大学のものは、小学高学年以上やその保護者を主たる対象としていたからである。こうした状況の中、本学での活動を開始し、2017年度からは保育者養成課程を持つ新たな大学が、幼児を含めたプログラムを開始している。

二つ目としては参加者の多さである。各大学の取り組みを単純に参加人数のみで比較し、プログラムの価値を判断すべきものではないと考えるが、参加人数の多さは、森林保全活動の広がりから考えれば、望ましいことには違いないと思われる。横浜市の開催してきた森の楽校開催大学間同士での報告会や年度ごとの横浜市森の楽校実績報告書<sup>5</sup>によれば、本学の地域住民の年間受け入れ人数は開始当時から他大学の7～8倍と多く（徐々に受け入れ人数が増加している他大学もあるが）、現在でも3～8倍程度となっている。またそれに関わる学生数は、例年5倍～10倍程度であり、受け入れ人数・参加学生数において、本学は他大学の牽引役であったといえよう。

三つ目に子どもへの指導方法と活動の内容である。保育者養成課程の教員と学生が、自然体験活動を吟味し、約半日の教育計画を立てた上で、一人ひとりの子どもが持つ興味・関心に合わせて、学生が「一対一」で応答的に自然活動を紹介するという幼児・低学年児童に最も適した形態での活動を提供している。また内容は、大学が持ち合わせている専門知識のみでなく、現在は失われてしまった昔ながらの一般的な子どもの自然遊びの内容が中心であるからこそ、体験を持ち帰って日常的に参加者が行ったり広めたりできるものとなっている。

これら3つの点で本学での取り組みは他大学にない特徴を持っており、横浜の地で6年間継続して行って来た意義があったと言えるだろう。

### (2) 保育者養成課程としての自然体験活動の独自性と報告の意味

次に、保育者養成課程における「英和もりっこ」活動とその報告の意味も検討する。

横浜市だけでなく全国に視野を広げて見渡すと、保育者養成課程の教育として自然体験活動を授業の中に組み込んでいる大学は、一見少なくないと思われる。試みに日本での発表論文を「保育者」と「自然体験」をキーワードにCinii（国立情報学研究所 文献情報・学術情報検索サービス）で検索を試みると38の研究、「保育者養成課程」と「自然体験」では3研究を見ることができる（2017. 12. 1 現在）。しかしそれらは保育現場からの報告か、あるいは大学で学生自身が自然体験をすることについての研究であり、学生が直接子どもと関わるものについては、一部の学生が自主的にボランティア活動として現場に入ったというような研究がわずかにあるのみである。

そこで論文・報告書ではなく、大学保育者養成課程でのカリキュラムそのものをインターネット検索すると、授業の中で地域の子どもを招いて学生が自然体験を提供している大学一つがヒットする。これは文科省・厚労省が示す幼稚園免許・保育士資格課程の中の定められた科目でなく、大学独自の授業として極近年開始されたようである<sup>6</sup>が、ホームページでの科目紹介情報であるため、その内容は限られており、詳細は明らかではない。

つまり本学のような活動は未だ少数であると同時に、報告・研究としても、保育者養成課程の必修授業で全ての学生が子どもたちに自然体験を直接提供することについて触れたものはない。

そうであるならば、こうした保育者養成課程での活動報告の意味は小さくないと考える。文科省は自然体験指導者が現在不足していることに警鐘をならし、正に現在、自然体験指導者の養成が求められているわけであるが<sup>7</sup>、それには将来、保育者養成課程の学生が自然体験を実際に子どもに提供する活動が、非常に有効であると思われるからである。

英和もりっこに参加した学生（376名）への調査でも、子どもたちに自然体験を提供する経験によって、子どもにとっての自然体験の意味を強く感じると共に、自然について学習しようという学生自身の意欲が高まったという結果（山下・谷田・岩本・木場，2016）を得ている。

## V まとめと今後の課題

これまで述べたように自然体験は子どもにとって重要なものであるが、さらに保育者養成課程の学生が対応したことにより、その体験は本論のⅢ 3 (2) ③「保護者が抱いた感想」で述べた通り、子どもにとってより良いものとなっていると考えられる。一方、学生自身の自然についての学びにも影響し、子どもへの提供を試みる体験によって学習が深められ、自然体験活動の指導者養成にもつながっている。このことが保育者養成としても重要であることは言うまでもない。

自然豊かな本学のような教育機関では勿論のこと、自然環境がそれほど豊かでなくとも、

あるいはまた植物学や環境学を専門領域とする教員の在籍がなくとも、子どもに自然体験を提供することは可能だと思われる。本学で行ってきた活動は、日本社会では昔から広く行われてきた草花遊び<sup>8</sup>が中心であり、必ずしも大学としての特別な知識を要するものではなく、直ぐに誰でも模倣・応用が可能なものである。また使用する植物は、雑草として道端やどこの大学の構内にも生えているようなものであった。植物があれば、昆虫などの生き物もやってくる。バッタや蝶を捕まえることは、子どもたちの楽しい遊びとなる。極小さな池であっても、オタマジャクシや水生昆虫も育つだろう。そうした自然に目を向ける感性さえあれば、おそらく自然体験活動は、多くの場で実現可能だと思われる。

本論では、本学の活動の内容を明らかにしているが、こうした体験の内容についての報告や提案も引き続き行い、より多くの場でこうした活動が行われるための基礎情報になることを期待する。それは就学前の自然体験の効果は認められつつも（独立行政法人国立青少年教育振興機構、2010）就学以降と異なり、未だ幼児ための自然体験活動の指導者養成には十分な注目が集まっているとは言えないからである。

そのため今後は、本学の保育者養成課程においてどのような自然体験活動の提供者（指導者）としてのカリキュラムを実施したのかを明らかにしていきたい。また先に述べた英和もりっこに参加した学生調査については、学会での発表のみにとどまり、研究としては途上にある。子どもへの自然体験提供によって学生の意識・意欲は向上したが、このことについて引き続き調査を行う必要もあるだろう。その上で自然体験活動を提供（指導）できる保育者養成のカリキュラム開発のための情報発信をしていきたいと考える。

最後に、幼稚園免許と保育士資格の両方を取得する保育者養成課程では、本学に限らず、学生の取得単位数も多く、実習もあり、教員も学生も共に多忙となりがちで、特別な活動に対しては時間も予算も余裕のない状況である。もりっこ活動が本学の必修授業の一部として成り立って来たのは、横浜市からの予算<sup>9</sup>を伴う支援と、大学組織としての授業への援助があったからに他ならない。今後も、このような活動を増やしていくためには、一教員だけの力では難しく、必要とされる公的な支援と大学組織の中での支援内容についても検討していくことが望まれる。

#### 〈註〉

- 1 児童福祉施設最低基準 第五章 保育所 第三十二条 五 に、「満二歳以上の幼児を入所させる保育所には、保育室又は遊戯室、屋外遊戯場（保育所 の付近にある屋外遊戯場に代わるべき場所を含む。以下同じ）、調理室及び便所を設けること。」 とある。
- 2 よこはま森の楽校は、横浜市のみどりアップ計画における「市民が森に関わるきっか

けづくり事業」の一環として2011年頃から本格的に始めた事業。横浜市が市内大学と連携し、森の魅力や役割を市民に伝える事業で、森林保全活動に関わるイベントを企画・開催することにより、市民と森の結びつきの拡大、みどりアップ計画への理解・関心を喚起することを目的としている。毎年、市内大学の応募企画を選定し、1イベントにつき10万円を上限とした予算の提供を行う。また採択した大学のイベントを市民に広報し、着実なイベント開催への支援と実施の確認も行う。

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kankyo/midoriup/> (2017.9.28 取得)

- 3 本活動の保護者の満足度には学生評価が深く関係している。270家族中、「不満」と回答した1家族の自由記述には、「植物などに対する知識がある学生もいれば、ない学生も居て、担当する学生による。」と記入されており、活動中、担当学生が一人ひとりの子どもに付き添うプログラムのため、おそらくは当該家族の担当学生の対応から、保護者が不満を感じる結果になったのだと推察された。これらの要望を踏まえて大学は、案内学生たちの注意を喚起し、一程度のレベルを満たす案内ができるよう指導していく責任があると考え、あくまで保育系学生の活動であり、植物学は専門としないので、要求水準によっては難しいことも考えられる。
- 4 2017年現在、4大学（フェリス女学院・東京都市大学・本学・横浜創英大学）が学内に地域住民を招くよこはま森の楽校イベントを開催している。2016年までは、本学以外は環境学部の研究室（教職課程ではない）が、蝶・木の実など、その都度のテーマについて、小学生以上を主な対象に、一斉活動的な体験活動と講義などのプログラムを行ってきた。2017年からは横浜創英の保育者養成課程所属教員とその学生が、森の楽校に加わった。

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kankyo/kisha/h29/171116-1.html> (2017.9.28 取得)

- 5 2011年秋より、よこはま森の楽校に参加する大学の活動報告と、市民が森林保全意識を高めるきっかけづくりとしてのイベントが行われている。各大学の報告書は横浜市によってまとめられ、年度ごとに参加大学に配布される。
- 6 常葉大学の浜松キャンパスで行われている授業には、保育者養成課程の学生が、地域親子に自然体験を提供するプログラムがある。自然豊かな地方キャンパスに地域の子どもと保護者を招いた情報が大学ホームページで公開されている。

<http://www.tokoha-u.ac.jp/news/170615/index.html> (2017.9.28 取得)

子ども健康学科カリキュラム（保育者養成課程）については、以下参照のこと。

<http://www.tokoha-u.ac.jp/department/health-produce/child/curriculum/upload/2017-kodomo.pdf> (2017.9.28 取得)

- 7 文部科学省青少年課は、子どもたちの自然体験減少に歯止めをかけるため、「青少年体

験活動総合プラン」2009 で、特に小学生が自然体験できるようにその指導者養成と、プログラム開発に取り組んでいる。

[http://www.niye.go.jp/services/plan/natural\\_experience.html](http://www.niye.go.jp/services/plan/natural_experience.html) (2017.9.28 取得)。

本学では、幼児～小学校2年までの子どもに対して実践力を身に着けられるように取り組んでいる。

- 8 昔ながらの草花遊びは、その遊びが発生した時代や地域は明らかではないが、「遊び図鑑」福音館書店(1987)の著者、奥成 達が「昔の子どもたちの遊び」という言葉を用いて紹介し「もともと遊びや、おもちゃの材料のほとんどは、草花、木、石、貝など自然にあるものを利用したものです。なかでも草花は、もっとも古い形のおもちゃだといえます。…中略…遠い昔の子どもたちの遊びの楽しさが、そのまま傳承されている“草花遊び”には、今でも素晴らしい魅力がひそんでいるはずです。」(P.10)と述べているように、人が生活し、身近に植物がありさえすれば、いつの時代でもそれを利用した遊びが繰り返され、年長者から年少者に伝えられてきたに違いない。日本では1960年代以降にテレビ、1980年代にはゲーム機が普及するまでは、時代を問わず大半の子どもは戸外に出て、遊んでいたことだろう。現在ではこう@ぼした文化が途切れ、再度、構築されることが望まれている。
- 9 予算は、例年、参加者が楽しむ自然物工作の教材費、森探検で使用するもの(魚網やプラスチックケースなど)、森を整備するための消耗工具備品(のこぎり、枝切りばさみ、鉋など)、参加者の申込みや受付・配布プリントの用意など大量に発生する事務仕事及び学生指導補助にあたる幼稚園教諭・保育士資格保持者アルバイト補助金、池の水の浄化と子どもたちの手洗いに必要な水を引くためのホース・バケツなどに使用されている。

#### <引用文献>

独立行政法人国立青少年教育振興機構 子どもの体験活動の実態に関する調査研究」報告書

〔概要〕 ー子どもの頃の体験は、その後の人生に影響するー 2010年10月14日  
PP.1-5, 8, 12-15

日本共産党都議会議員団 都内保育施設における園庭の確保状況 別紙①-1, ①-2, 2015年2月 [http://www.jcptogidan.gr.jp/html/menu5/2015/20150224191648\\_2.pdf](http://www.jcptogidan.gr.jp/html/menu5/2015/20150224191648_2.pdf) 2017年2月12日取得

文部科学省 平成25年版子ども・若者白書(全体版)第1部第3章第2節体験活動1現状  
1-3-30 図, 1-3-31 図, 第1-3-32 図, 第1-3-33 図, 第1-3-34 図, 第1-3-35 図, 第1-3-36 図  
PP.26 - 28 2013 <http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h25hon>

pen/b1\_03\_02.html 2017年1月17日取得

別惣淳二・長澤憲保・上西一郎・一山秀樹「自然体験活動指導に求められる教員の資質能力に関する調査研究」学校教育学研究, 第15巻, PP. 1-12 2003年1月

山下久美・加覧めぐみ・澄井彩香・谷田創「自然体験が幼児および学童に及ぼす教育効果に関する研究」保育子ども年報2016 PP. 59-70 2017年3月

山下久美・谷田創・岩本彩・木場有紀「保育者養成における子どもの自然体験活動提供の意味」日本保育学会第69回大会発表要旨集 P. 725 2016年4月



The significance of activities in which children  
experience nature in a Child Care and Early  
Childhood Educator Training Course  
– A case study of the “Forest Kids” activity jointly run  
by Toyo Eiwa University and the Yokohama local government –

YAMASHITA Kumi

**Abstract**

In recent years, the MEXT(Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology) Japan has been promoting nature activities for children. It is because it has been found in investigations that such activities have had an important educational effect on children. In recent years, however, the number of natural areas has decreased. Therefore, chances for children to experience nature have also decreased.

In 2012 Toyo Eiwa University and the Yokohama local government created a nature activity program for parents and children in the region. The place provided for this was the wooded area on the campus of Toyo Eiwa University. According to the results of a survey, satisfaction of parents and children who participated in this program was high. From these results, it is recommended that this program and other such programs at universities that train childcare workers and early childhood educators should continue to be developed.